

平成十四年度読書感想文コンクール作品集

も  
さ  
く

大分工業高等専門学校  
学生図書委員会  
教官図書委員会

# 目次

講評・その他

入選 第一位 『老人と海』を読んで

入選 第二位 『世界がもし百人の村だったら』を読んで

入選 第三位 『恩讐の彼方に』を読んで

佳作 『ぼくにはまだ一本の足がある』を読んで

◇ 『遠い海からきたCOO』を読んで

◇ 自分らしい生き方とは『車輪の下』を読んで

◇ 『シーラという子』を読んで

◇ 『天使がくれた時計』他二冊を読んで

◇ 『十五少年漂流記』を読んで

◇ 『天国までの百マイル』を読んで

一般科目 国語科教官 山田 繁伸 2

電気工学科 三年 後藤 泰徳 3

電気電子工学科 二年 島田由梨絵 3

土木工学科 一年 國安 美理 5

電気電子工学科 一年 得丸 友香 6

電気電子工学科 一年 脇阪 洋平 7

機械工学科 二年 梅田 裕太 8

制御情報工学科 二年 朝見 陽加 9

機械工学科 二年 坂本 由香 10

電気工学科 三年 壽 一輝 11

制御情報工学科 三年 古賀ひとみ 12

編集後記

学生図書委員長 安部 絵美  
(機械工学科 五年)

## 講評・その他

一般科目 国語科教育

山田 繁 伸

第一位後藤泰徳『老人と海』。この作品は読書感想文用図書の設定のひとつになっている。したがって、感想文の中にいかに新鮮な切り口を提示するかということは、意外と難しい。後藤君は、老漁師の孤独の問題、魚の命を受け継ぐという生命の永遠性の問題などを切り口とした。家族、親戚、クラスメートなどに囲まれた自分が常に助けられていることを作品から読み取った。

しかし、今ひとつつきつめて考えてほしかったことがある。それは、後藤君と周囲の人達の関係が、老漁師とまぐろとの関係と同じレベルであるかということだ。そのことは、後藤君の指摘しようとした他者に深くかかわっている生死の問題や生命の永遠性の問題とも関連している。

第二位島田由梨絵『世界がもし百人の村だったら』。この本は六十四億の人達を百人にまとめてしまうと、性別がどうなるとか具体的な数字を示し、わかり易く説明している本らしい。世界が単純化されているため、イメ

ージが具体的にわき、世界の現状が小学生にでも思い描けるらしい。島田さんも素直に世界の現状を思い描き、日本人である自分の幸福を再認識している。そして、逆に困難な状況に生きている人達の存在を強く意識した。最後に、この村を愛するだけでこの村を救えるだろうかと危惧している。ここには、この本における世界認識の限界に対する島田さんの鋭い直感が表出されている。出来ることならば、そのところを詳説してほしかった。縮小してしまったことよって、見えなくなってしまった問題もあるであろう。

第三位國安美理『恩讐の彼方に』。この作品も『老人と海』と同様にポピュラーなものであるから、新しい切り口を探し出すのが難しい。許されようとしても許されない罪があり、市九郎は救われようという気持ちを捨て、一心に槌を振るった。そこに魂の真の救済があり、実之助の心を動かしたという指摘は新しい。魂の救済を拒絶したところに、真の救済を発見している。

以下読書について考えてみる。

経済学者の内田義彦氏は、『読書と社会科学』(岩波新書)で、二つの読書のことを書いている。「情報として読む」読み方と「古典として読む」読み方である。前者は、文字通り新しい情報や知識を手に入れるための読書である。アルバイトであろうが、自動車のことであろうが、自分の知らないことを読書によって知ることが出来る。学生が教科書や参

考書を読むことも、これに含まれる。

一方、後者の「古典として読む」は、源氏物語や論語を読もうということではない。「情報を見る眼の構造を変え、情報の受けとり方、何がそもそも有益な情報か、有益なるものの方を求め方を―生き方をも含めて―変える。変えるといつて悪ければ新しくする。新奇な情報は得られなくても、古くから知っていたはずのことがにわかには新鮮な風景として身を囲み、せまってくる」と言うような読み方を指す。「情報を受取る眼を養うための読書」とも言っている。氾濫する情報の中で、正しく判断する力をつけていくための読書である。ところで、先日、大分高専を卒業して有名国立大学の工学部に編入学していた学生が私のところへやって来た。近況を聞くと、この春大学を卒業して、今は塾教師と作業員のアルバイトで生活していると言っていた。敢えて定職に就かず、ある宗教の布教活動をしていると言った。彼の生き方を否定する資格は私にはないが、優秀なエンジニアになつたであろう彼が、なぜ宗教に近づいたか考えてみた。私の憶測に過ぎないが、それは十代の後半に、生き方を含めた、ものの考え方を変えるトレーニングであるべき「古典として読む」読書を怠ったからではなからうか。読書は予防接種のごとくワクチンを体内に取り込むことである。本の中での反抗、孤独、殺人、不倫すべてが、多感な青春期の有益なワクチンである。

入選第一位

『老人と海』を読んで

電気工学科 三年

後 藤 泰 徳

この小説は、一匹の大魚を相手に雄々しく戦う老人の姿を通して、人間の勇気や自然界の厳しさなどが描かれている作品である。

主人公のサンチャゴ老人は、来る日も来る日も一人小舟に乗って漁へ出るが、魚が一匹も釣れない日が今日で八十四日も続いていた。しかし次の日、ついに一匹の巨大な「まかじき」がかかったのである。そしてそれが、老人と大魚との長い死闘の始まりだった。手と肩に傷を負いながらも、夜も眠らずに老人は耐え続けた。三日後、老人は弱った大魚を引き寄せ、全身に残っている力を振り絞って鉗を大魚の横腹にぐさりと突き刺したのである。そして、死の手傷を負った大魚は息絶え、ついに老人は大魚を仕留めたのだった。

しかし話はまだ続く。そこから港へ帰る途中、小舟には乗せる事の出来ない大魚を舷へ縛りつけたのだが、血の臭いを嗅ぎつけた鯨が次々とやって来たのである。老人は鉗で鯨を刺し追い払うが、港に着く頃にはその大魚は骨だけになっていた……。

おおよそこのような話なのだが、最初にこ

の小説を読んだ時、僕は老人の生きる姿に深く感動した。話し相手も誰もいない大海原にポツンと一人。とても孤独であったと思う。しかし老人は、鳥や闘っている大魚に話しかけ、そして自分自身にも語りかけ、勇気づけ、励まし合い、闘いに挑むのである。やはり人間は一人では生きていけない、必ずどこかで支え合って生きていくんだと改めて気付かされた気がする。家族、親戚、クラスの友達、部活の仲間、学校の先生……。僕の周りにはたくさんの人々がいる。そして、その人々と互いに助け合い、それぞれの目標に向かって一歩ずつ前進して生きている。もし、その目標が達成された時は、きっと喜びと充実感で胸がいっぱいになるだろう。だからこそ人生は楽しいんだと思うし、人と人との繋がりは大切にしていかないといけないと思った。

老人は、「あの大魚も俺の友達だ。」と言っている。しかし、友である大魚をなぜ殺さなければならぬのか疑問に思った老人は、「ただ生きるため、食料として売るためではない。誇りのため、自分が漁師だからだ。」と自分に訴える。しかしすぐに、「奴（大魚）を俺は愛している。愛しているんなら殺したって罪じゃあるまい。それとも、なおさら重い罪になるのかな？」と新しい疑問にぶち当たると

結局答えは出せず、「どんなものでも何らかの形で他のものを殺しているんだ。魚を獲るって事は、俺を生かしてくれるわけだが、同時に俺を殺しもある。」と老人は諦観したので

った。この部分で著者が伝えたかった事は、海に象徴される生命の永遠性ではないのだろうか。魚を獲って自分は生き続けている。そして、魚の命もその人に受け継がれ生き続ける。そんな「生と死」というテーマをこの部分で投げかけ、「命の尊さ」を読者に伝えたかったのではないだろうかと思う。

この小説の最後で、老人は大魚を持って帰る事が出来なかったが、老人の旅は決して無駄ではなかったと思う。物事は最終目的にたどり着くまでの過程が大事であって、結果が全てではないと思うからである。その過程で学んだ事を次にどう生かすかが一番大切ではないだろうか。僕もこの小説を読んで学んだ事を自分の人生で生かしていけるよう努力したい。

入選第二位

『世界がもし百人の村だったら』  
を読んで

電気電子工学科 二年

島 田 由梨絵

日本人が豊かで恵まれている、ということ  
は大多数の人が知っていることであろう。普  
段の生活でそれを意識することはなくても、  
ニュースなどで飢餓に苦しむ人や、空爆で命

が危険にさらされている人をよく見る。わたしもただただ漠然と、「自分は、幸せな方なんだな。」などと思いつながら今まで生きてきた。しかし、実際に貧しい人はどれくらいなのか、飢餓や病気に苦しむ人はどれくらいなのか、といった具体的な数字は判っていない。この本はそんな私の知的欲求を満たしてくれるのに、ちょうど良いものであったのだ。

百人のうち五十二人が女性、四十八人が男性……から始まり様々な数字が示されてゆく。

中でも驚いたのは、十人に一人が同性愛者だということ。わたしのクラスには約四十人いるが、その内の四人が同性愛者、という計算になる。このクラスに同性愛者がいるとはどうも考え難い。テレビ等では同性愛者を揶揄する事が多いが、わたし達の反応をもっと見直さなければならぬな、と思った。

また、大学に行っているのが一人だという。わたしの通う高専は、卒業すると短大卒と同じ扱いになるので、大学に進学する！と言う人はあまり見かけない。高専的には、この1%という割合は妥当だろう。しかし、わたしの地元に進学校で、大学受験する友達にとっては、やはり変な感じがするらしい。

百人のうち、十人が栄養不足で一人は死にそうだが、十五人は太りすぎ。富を六人が五十九%を占め、二%を二十人が分け合っている。コンピュータを持っているのが二人、しかし十四人は文字が読めないという。

日本は、わたしは、本当に恵まれているな

と改めて気付かされるような数字が次々と並べられている。わたしは、たくさんの人達を踏みつけにしたその上で、この幸せな生活を日々送っているのだろう。命が危険にさらされていらないという事の、貴重さを深く感じ、幸せをあらためて噛みしめる。

きつとこの本が話題になったのも、読んだ人がみんな「自分は、なんて幸せなのだろう！」と、感じたからではないだろうか。分かっていながらも、実際の数字を目にするとショックを受ける。そして、日本に生まれて本当に良かった、などと思いつながら難民募金の箱にチャリンと十円玉を入れるのであろう。わたしも勿論もちろんそう思った。自分は幸せで、とてもワガママだ。何かしなくては、という気になってしまふ。

しかし、この本には大人の偽善というか、「キレイゴト」というのを感じてしまった。

世界には学校へ行けない人がたくさんいるのだ。だから学校へ行きなさい。食べられない人がたくさんいるのだ。だから食べなさい。この本の元々は学校の先生のメールらしいが、なんとなく先生らしい無言のメッセージだ。わがままを言うな、我慢しろ。そういう大人の無言の圧力を感じるのである。

インターネットなどの感想欄を読んでみると、「自分は幸せだと思った」という字が並ぶ。でも、それは何か変だと思ふ。実際に募金をするならば、行動を起こしているのだから偽善ではないのだろうか、何かおかしい。

日本に生まれて良かった。わたしより不幸な人が沢山いるのだなあ。カワイソウ……そういう安心感を与える為の本になっていないだろうか。幸せだという安心感をこのご時世みんな求めているのではないだろうか。だとしたら、この本の伝えたい事は一体何であったのだろうか。

この本を読んでも「たとえあなたが、傷ついても傷ついたことなどないかのように愛する」事は、わたしには出来ない。傷ついたら自分を傷つけた人間を憎む。それは平和だからか、わがままだからか。飢餓で苦しむ人が沢山いても、食べ物を残す自分がある。もしもたくさんわたしたちが

この村を愛することを知ったなら

まだ間にあります

人びとを引き裂いている非道な力から

この村を救えます

きつと

本はそう結ばれている。しかし、わたしは飢えに苦しむ子ども達を助ける術がない。せいぜい募金をし、何か役に立つものを送る、それぐらいである。何も出来ない。この村を愛せば非道な力から人々を救えるのだろうか。答えは否ではないか。

私は、とりあえず今、何が問題で人が苦しむことになっているのか、それを知ることから始めようと思ふ。私なりの答えが出るまで考え続けていこうと思ふ。みんなが考えたら、もしかしたら世界は変わるのかもしれない。

『恩讐の彼方に』を読んで

土木工学科 一年

國 安 美 理

この物語は、私達の住む大分県の耶馬溪洞門を舞台としています。そこに興味をひかれて読みはじめました。

主人公、市九郎は自分の主人である中川三郎兵衛に手打ちにあい、逆に主人を殺してしまいます。主人の妾だったお弓と共に江戸を逃げた市九郎は悪事を重ねながら信州鳥居峠で茶店を開き、金のありそうな旅人を殺しては、その金品を奪うという生活をおくりますが、三年目の春、若夫婦を殺した市九郎は、お弓のあまりの強欲さに嫌悪を覚え茶店を逃げだします。翌日、美濃の浄願寺に駆け込み出家します。以後名を了海と改め、ひたすら仏道修行にはげみます。諸人救済の大願を起こした彼は諸国雲水の旅に出ます。善根を積みながら旅をする途中、九州耶馬溪の難所で人々の苦難を知り「この二百余間に余る絶壁をくりぬいて道を通じよう」と言う大誓願を立てます。村人に協力を求めるが誰もが耳を傾けない、では一人でこの大業に当たろうと渾身の力をこめて第一の槌を下ろした。嘲笑う村人をよそに、少しずつ穴は掘り進んでい

く。村人達は協力したり落胆したりという繰り返しの中で、市九郎は一人黙々と槌を振るい続けます。十八年の年月が過ぎ穴はいつの間にか二分の一に達し、この奇跡に村人は全面的に援助をし、工事は急速に進みます。

一方、中川三郎兵衛の一子、実之助は敵・市九郎を探して諸国をまわり、苦勞の末この地に市九郎を見つけます。村人は、せめて穴が貫通するまで敵討ちを待ってくれるよう懇願し実之助も思いとどまる。工事を見守るうちに実之助も一緒に槌を振るうようになる。それから三年、第一の槌を振るってから二十一年目、洞門は開通し、二人はすべてを忘れて感激の涙にむせびます。

私が幼い頃読んだ「青の洞門」は、ただ一人の僧侶が人々の苦難を見かねて穴を掘り、初めは相手にしなかった村人も最後は協力して長い年月をかけて掘りあげるといふものでした。その時はコツコツと積み重ねていく事で大きな事を成しとげていけるのだという感想だけでした。

しかし、この「恩讐の彼方に」を読んで、人が生きて行く中で犯す罪と罰、人が人の心にあふれる事、そして人が人を許す時という事を考えさせられました。

市九郎の人間とは思えない、人の心をどこかに置き忘れて来たかと思えるほどの悪事の数々は、出家したから、ごんげしたからといって許されるような物ではなかったと思います。反省し諸人救済の旅に出る時、そこには

許されるためと言う気持ち少しあったのではないでしょうか。そうして着いた耶馬溪の難所。私が罪を悔いみそぎの旅をしていたとすれば、自分の成すべき事を見つけた時、心の中に喜びを感じると思っています。市九郎の心はどうだったでしょう。その喜びがあったからこそ誰も耳を貸さうとしない村人達に何を思う事なく第一の槌を振るう事が出来たのだと思います。

一方、実之助も苦しい旅をします。今の時代、私達ならインターネットだ何だと情報網を使つて探し出すだろうし、交通だつて便利、それで一二年も探して見つからなければあきらめるでしょう。第一、敵討ちなんてナンセンスと思うでしょう。しかし、実之助の時代、敵を討たねば家を継げない。何という不条理でしょう。実之助はどんなに市九郎を恨んだ事でしょう。その旅が苦しければ苦しいほど、年数がかかればかかるほどに、その恨みや憎しみは強くなつていだろうと思えます。そうして見つけた敵市九郎はただ黙々と槌を振り、村人達は洞門が貫通するまで待つてくれと言う。その悲願をまつとうさせてくれと願う、そこで待つ事を選ぶ実之助は何と心の広い人なのでしょう。でも良かったなと思います。洞門貫通を願う村人の前で市九郎を討てば実之助も鬼です。その旅が苦しかったからこそ、そんな鬼にはなつてほしくなかったのです。

黙々と穴を掘る市九郎と村人を見てい

ちに、実之助も一緒に槌を振るいます。そして三年、道は開通します。そこには長年の恨みも憎しみも消え、ただ喜びの涙にくれる姿しかないのです。

二十一年間、何と長い月日をかけ、ただひたすら槌を振る。協力のない村人を恨む事もなく、最後には許される事も望まず。自分の成すべき事と信じて。そこには過去の悪業を消してなお余りある心を持つものがあつたのだと思います。だからこそ実之助の長年の恨みも憎しみも消しさり、人間愛を取り戻す事ができたのだと思います。人間は誰でも大なり小なり罪を犯します。そこから反省し人として生きていく事、その罪を許す事、とても大切な事のような気がします。『罪を憎んで人を憎まず』と言うのは簡単です。でも自分が被害者となった時、相手を許す事ができるのかと言うと、まるで自信がありません。しかし、人を恨んだり憎んだりすれば自分の心もゆがみ、汚れる事だと思えます。私は人として生きて行きたい。人の心を感じとり優しさを失わず、人間愛を持った大人になりたいと思います。

佳作

## 『ぼくにはまだ一本の足がある』 を読んで

電気電子工学科 一年

得丸友香

「今を生きる。」という言葉、私の友人はある人に貰ったそうです。そして私も貰いました。病気というのは身体だけでなく、本人の心や周りの人達の心までも侵します。ひどくない病気でさえも、心が病んでしまえば、医者者の技術だけでは治すことはできません。ただ、「今を生きる」という意志をもっていれば、たとえ死が訪れたとしても、生きるところに悔いはないのではないかと思います。友人は、自分なりの生き方で今を生きています。私も生きています。そして、周大観という男の子も、自分の人生を一生懸命生きました。この本は、そんな彼の人生をつづった本です。私は彼を尊敬しています。彼は台湾で生まれた男の子で、一九九七年の五月に癌で亡くなりました。尊敬している理由は二つです。一つは、最期まで諦めないで一生懸命に生きただけです。彼は彼なりの「今を生きる」で生きたのだと思います。もう一つは、自分をよく解っていて、周りの人達のこともしっかり解っていて、優しさでいっぱいの人間だからです。

らです。病室で彼がつくった詩、彼が口にした言葉によって、どれだけの人が助けられたかはわかりませんが、私はたくさんの勇氣や優しさを貰った気がします。

この本の中には、たくさん詩が書かれています。それは、彼が入院生活の中で感じたことをひとつひとつ書いたもので、どの詩も九歳の男の子が書いたとは思えない程、意味が深く、表現が豊かな作品ばかりです。中には、看護婦（看護師）さん達への「ありがとう」の気持ちを込めたものもありました。自分が痛くて苦しいのに、そうやって思うことのできる彼をすごいと思います。そして、癌に対する作品もありました。それも「こわい」ではなく、「やっつけてやる」といった詩です。彼は両親と弟の四大家族で、たくさん愛情を受けて育ちました。両親は頭の良い人で、彼も小さな頃から好んで本で遊び、本に興味を持ち、たくさん読んでいました。ほかに色々なことに興味をもっていて、バイオリンを弾いたり、外国へ旅行に行ったり、公園をきれいにしたりしていました。そんな生活をしてきたからこそ、広い目でまわりを見る事ができて、優しい人になっていったのだと思います。

しかし、彼の足には腫瘍ができ、癌に侵されてしまいました。腫瘍の切除、入院、退院、高熱、手術、化学療法。幾つもの困難を繰り返して、必死に治そうとしました。一番痛いのは彼で、一番苦しいのは彼でした。彼はそ

んな中でも両親に「大丈夫だよ。治してみせるよ、頑張るよ。」といった強い思いを込めて詩を書いていたのです。足を切ることしか治療の方法がなくなってしまう時、「ぼく、足を切るよ、悲しまないで。足が一本なくなつたつて平気さ。」と言えた彼に、きつと力は無かつたと思います。でも、強さがあつたのだと思います。私がおもひ彼だつたなら、ただ苦しめてこわくて、泣き叫ぶだろうと思います。そんな時でも負けない気持ちをもつて、それを周りに与えてくれた彼を、私は心から尊敬しています。

私が一番心に残っているところは、彼の遺言と家族へのメッセージです。もうすぐ自分が死んでしまうかもしれないという時、彼がとつた行動は、立ち上がることでした。一本の足で立ち上がることでした。彼は自分で立ち、そして自分の死が近いことを受け入れ、他の癌患者へ「勇気をもつて立ち向かつて下さい。」と書きました。そして、はじめて泣いたそうです。そして、両親に「また生んでね。」と言つた後、息をひきとつたそうです。

私はこの本を中学二年生の時に購入しました。内容を知つていて買ったのではなく、偶然に手にしたものです。なぜ買ったのかはわからないし、癌についてよく知つているわけでもありませんでした。でも手にしたのは、「ぼくにはまだ一本の足がある」という表紙の詩と絵を見て、読みたいと思つたのだと思います。「一本しかない、どうしよう。」とし

か思えない私は、この本を読んで、九歳の男の子に多くのことを教えてもらいました。自分のことをもつと解つて、まわりにいる全ての人達のことをもつと解つていたいと思ひました。今はまだ、どうしたらいいのかわからないけれど、いつか「一本しかない。」ではなく、「まだ一本ある。」という彼のような考え方のできる人になりたいと思います。

この本は、小さな男の子の大きな心の中が見られる本です。小さな壁でも大きな壁でも、もしぶつかつたなら、彼のことを思い出したと思います。諦めないということは決して簡単ではないです。友人が諦めかけた時、癌に負けない強さをわけて支えていきたいと思ひます。強くなれるこの本を、私はずっと持つていようと思ひます。

佳作

## 『遠い海からきたCOO』 を読んで

電気電子工学科 一年

脇 阪 洋 平

この本を読んだのは、今回で二回目です。この本を最初に読んだのは、中学生の頃でした。最初に読んだ時は、地球には、まだ知らない生物がたくさんいるのだろう、私も見て

みたいなどという感想を持ちました。しかし、今回読んで思つたことは、一、二年でとらえ方が変わってしまうのかと驚きました。

この作品は、一人の少年と恐竜の子供の話です。私が作品を読み一番感じたことは、人間は自分勝手な生物なんだとつても強く感じました。よく考えてみたら、人間ほど自分勝手な生物はいないと思ひました。私が最初にこの作品を読んだ時に、恐竜みたいな未知の生物が見つければいいのに、と思ひました。しかし、今回この作品を読み、この考えが百八十度変化しました。もし、仮に未知の生物が発見されても、発見して喜ぶのは人間だけだと思ひます。今、未知の生物が発見されたら、解剖したり、生息地を調べたりなど、きつと人間の都合のいいようにされると思ひます。今まで人はたくさんの動物を絶滅させてきました。しかも多くの理由は、お金目的ばかりでした。そのようなことでは、私は未知の生物を発見しても、また同じような失敗を繰り返すだけだと思ひます。

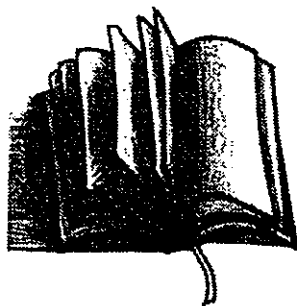
この作品で私は、人と他の生物とが共存していくことは、私が想像している以上に難しいことなのだと感じました。今、とつてもすごい早さで科学技術や医学などいろいろな分野が発展しています。その中には、はたして人間が手を出していいのかと思ひものもいくつかあります。私が最近一番興味をもつているのは、クローン技術のことです。たしかに、この技術が進んでいけば、たくさんの人々の



命、特に病気など今の医学では助からない命も助かるかもしれない。しかし、一方では、悪用されることも充分に考えられます。それに、もしも、体内にある臓器を他人に移植するためだけにクローンを作ったとしたら、そのクローン人間は、死ぬために生まれてきたことになりません。もし、私が死ぬために生まれてきたとすれば、それは、言葉にできない恐怖だと思えます。また、普通の生活をする場合でも、きっと人々は、快くクローン人間と向きあえはしないでしょう。今、現在、人間と人間の間にさえ、差別やいじめなど数多くの問題がある世の中で、ましてや、人の命を平気で奪うような人がいる中で、はたして、クローン技術は、正しい方向に使われるでしょうか。私は、正しい方向には使われないだろうと思います。他人を大切にできない人間が、人間以外の生物、クローン人間を大切にすることはできないと思うからです。しかし、もしも、自分が重い病気にかかり移植をしなければならぬ状況になったなら、はたしてどんな行動をとるか、今の私には考えることも、想像することもできません。たしかに、重い病気の人に、移植はあきらめて死んでくたさいとは言えません。クローン人間を作ることの良いことか悪いことかは、永久に答えは出ないと思います。しかし、どんな答えが出たとしても、クローン技術を悪用することは、絶対に許されないことだと私は、思います。

今まで人類は、地球上で一番進化した種族です。地球上で一番優れた知識であるテクノロジーを持っていきます。物は豊かになり、食べものに困ったり、寒くて死んだりするようになることは、全くなくなりました。たしかに、人類はここ数百年、多くの努力をして文明を発展させてきましたが、それは、人類の自分勝手な考えでしたことです。私は、これからは自分勝手な考えではなく、他の生物、自然などのことを考え、同じ失敗を繰り返さないようにしていくべきだと思います。

私たち人類には、たくさん知識があります。これからは、その知識を自分たちのために使うのではなく、地球のために使うべきです。地球上で、一番の知識であるテクノロジーを持つている人類が唯一、どの生物よりも足りないことは、仲間を大切にすることです。この能力がどの生物よりも衰えています。私は、この作品で、人間は人間だけでは生きていけないのだと、強く訴えられたような気がしました。私もこれからは、身近な人から大切にしていきたいです。



佳作

## 自分らしい生き方とは— 『車輪の下』を読んで

機械工学科 二年

梅田 裕太

僕がこの本を読もうと思ったのは、まずこの本の題である「車輪の下」という言葉からこの本はどういうことを書いているのだろうと不思議に思ったからです。僕は、はっきり言ってあまり読書は好きではありませんが、この題の意味は何だろう、著者は何を言いたいのだろうという疑問から読もうと決意しました。そしてこの本は将来の僕達の生き方について何か訴えているような感じを受けました。この本の主人公であるハンス・ギーベントトという少年は、天分があり、町や学校から将来を期待されたまじめな子でした。また、「小さい町にそんな人間はいない。」と言われるほどでした。僕はこの時点では、この少年は、今で言ういい高校や大学に行つてトップクラスで有名な企業に就職していくんだろうなと感じました。しかも彼は、神学校の入学試験に受かるために夜遅くまで、しかも頭痛がするくらいまで勉強しました。また学校の校長や近所の人や親までも、彼のまわりのすべての人が彼に期待していました。この時僕

はふと高校入試のことが頭に浮かびました。僕は入試の前はとても緊張していました。また将来を決めることだからなおさら入試が怖かったことを覚えています。でも僕はあまりまわりから期待されているという感じはうけませんでした。プレッシャーに弱い僕がもしハンスのような状況に置かれたらなら、言葉に言い表せないほどの恐怖を味わっていたと思います。ハンスがそういう恐怖を振りほどこうとして勉強だけに集中したのは無理も無いと感じました。

しかしハンスは僕が初めに考えていたハンスと全く正反対の人物になってしまいました。ハンスは神学校には受かりましたが、そこで彼の人生は狂ってしまいました。そうなってしまったのはなぜだろうと僕は考えました。

僕が考えた一つ目の理由は、そこでの生活は少年の心理を踏みにじる規則づくめなものだったということです。例えば、遊びざかりの少年たちに勉強だけをするように強制していたという点です。さらに勉強のさまたげとなる物や友達関係において先生や、さらに校長先生まで首をつっこむほどでした。ハンスがそのようなことをされて、勉強しなくなったのも分かるような気がしました。勉強以外何も楽しめない学生生活はつまらなさすぎると思います。さらに一々観察されてそういうしばられた生活は僕もいやです。そこで生活はハンスが思っていたのとは正反対だったのだろうと思いました。

二つ目の理由は、ハンスの友達にあったと思います。ことわざの中に「朱に交われれば赤くなる」という言葉があります。これは人は、その環境や交際する友人によって、よくもなるし悪くもなるということ、よい友人を選ぶことが大切であるという教えですが、まさにその通りだと思えます。ハンスの友達はあらゆる問題を起こして、先生や校長先生から目をつけられていました。結局その友達は学校をやめてしまいました。それでハンスも影響を受けてしまいました。僕もハンスの友達のような人と付き合うのではなく、ことわざにもあったように、よく友人を選んで、いい友人と付き合うようにしていきたいと思いました。

三つ目の理由は、彼には、はっきりした明確な目標がなかったという点です。つまり親や周りの人が敷いた道をただ押されて歩んだだけのことでした。自分が将来、何になりたいたいというようなことは漠然としか決めていませんでした。ハンスは確かに頭がよくて、才能もあって、いい少年でしたが、自分のはっきりした意志がないために挫折してしまいました。

結局、将来を期待されていたハンスは学校をやめて、なんと平凡な見習い工として出なおそうとしました。ハンスは、はっきりした目標がなかったために最後はこういう結果となってしまうました。かつては優秀な学校に行っていました。何の役にも立っていません。

ん。さらに将来を本当に期待していた親や学校や近所の人達はこういう思いだったのでしょうか。ハンスにはもつと自分を生かせるような職があったのではないかと思えます。そして結局彼は死んでしまいます。ハンスの生き方はとてもはかなく感じました。

僕もたぶん、ハンスと同じ年頃で、同じような境遇にあるかもしれません。ハンスの生き方は僕にとつてとてもいい教訓となりました。いくら頭がよくて、優秀でも、学校生活を有意義なものとして目標をもって過ごした人の方が成功するということです。ハンスは最後は車輪の下敷きになってしまいました。そうならないようにこれからも頑張りたいと思います。

佳作

## 『シーラといっ子』を読んで

制御情報工学科 二年

朝 見 陽 加

喜怒哀楽を表現できなくなったとき、人は自身を厚い殻に閉じこめたまま、破壊・破滅に向かうのだと思う。

涙を流すことを躊躇い、その涙の意味を知らなかった六歳の子、シーラ。「絶対泣いたりしないから。」その勇敢さの裏に隠されてい

た不安や淋しさ、恐怖といったらとても六歳という幼い子どもが背負えるようなものではなかったのではないだろうか。

「貧困」その一言で片付けられ、見捨てられがちな地域がある。最近では、大体の問題の発信地はここだと、別の意味で注目を浴びたりすることもあるが。シーラはそんな地域の一角である季節労働者のキャンプに住んでいた。とても六歳のかわいい女の子には似合わない、古ぼけ汚れた男の子用のTシャツと強く鼻をつく程のにおいのオーバールがその生活の厳しさを物語っていた。常に何かに怯え、その寂しさや辛さを怒りに変えて生きてきた。彼女にとっては暗く先の見えないうトンネルの様な毎日を、その持ち前の勇敢さで耐えに耐えていた。人に甘えることや涙を流すことも知らずに。

自分を守ることしか知らなかったシーラには涙を流すことはただの敗北を意味するものでしかなかった。しかし「涙を流すこと」が敗北を意味し、そして負けることが本当に悪いことなのだろうか。私はそうは思わない。涙は、怒られた時・追いつめられた時だけに流すものではないと思う。涙を流すことは、ごく自然なこと、誰にだって意味もなく流した涙が一度か二度くらいあるはずだ。しかし、誰しもシーラのような環境下におかれると、考えてしまうだろう。そう思うと、涙を自然に、そして思う存分声を上げて泣けるようになったシーラは何よりも成長したと思う。ト

リイに出会えて本当に良かったなあと思った場面の一つである。トリイは自分のクラスの子ども達が大好きで、一生懸命みんなの世話や勉強を教えたりした。素直でまっすぐ飛びこんでくる子ども達と、そのまま受けとめようとするとトリイ。彼らの間に築かれたものはきつと普通のクラスより、何十倍も、素晴らしいものだったのではないだろうか。

たまの偶然がここまで人を、世界の見方を変えらるとは、本当に凄くことだと思う。偶然こそ、その人の人生にとって必然的なものになる。そういうことなのかもしれない。プラスなことだけが全てではなく、マイナスなことと全てそれは、必然、なければならぬことだったのかもしれない。私は、この二年近くの間、後悔することが多かった。要するにマイナスの要素となる出来事が多かった。しかし、このところその要素も偶然的出来事ではなく、必然的なものだったのではないかと考えるようになってきた。シーラの人生に突如現れ、彼女を本来の彼女の姿、六歳の幼い子どもの姿に戻したトリイとの出会い。こんな奇跡的で、ドラマチックな出会いはそうないかもしれない。しかし誰しも毎日過ごす中で、それぞれ新しい出会いをし、仲よくなり、そして別れを告げる。当り前と呼ばれた普通の中に実は何かがあるのではないだろうか。いつしか当り前・それが普通、などと感じていることに何か潜んでいて、運命を左右しているんじゃないだろうか。そして人間

には、命ある生き物では、そういった運命に動かされ、何かを人にあたえることのできる力を持っているんじゃないだろうか。その力とは、感動であったり魅力であったり……

人は今日以外の日には生きられない。明日にも昨日にも生きることができない。だからこそ、それぞれの偶然的な必然を受け入れ、ただ今そこにある事実をそのまま受け入れることが、一番笑顔でいられたり、素直に涙を流したりできることなのではないだろうか。

シーラのように、暗く悲しい過去を明るく今でかき消し、自分を信じる。私は見習い、忘れないでいようと思う。この聡明で勇敢な子のことを。

佳作

## 『天使がくれた時計』他二冊 を読んで

機械工学科 三年

坂本 由香

この三冊の物語には、最初から最後までほとんどの場面に悲しい雰囲気があったよつていたよつて感じる。初めは物語の中に出てくる「いくつかの別れ」のせいかと思っていたのだが、実は「人種差別」や「不況」が原因だった。「いくつかの別れ」が起こった背景に

も、この二つの原因が大きく影をおとしていた。

ある時、不況で職を失った白人が、「黒人が自分達の仕事を横取りしている。」と言っていたのには驚いた。ただ肌の色が違うだけで相手が自分より下だと思ったり、人間ではないように扱ったりできるのが、私には理解できなかった。それに、いくら黒人を見下しているからといっても、あまりに自己中心的な発言だと思ったのだ。物語の中でデイヴィットは、黒人従業員をリストラしろと言ってきた白人従業員に対して、「彼らにだって妻もいれば子供もいる。もし君がクビになったら家族を養えなくなるように、彼らにも同じことが起こる。黒人の子供は腹が減っても平気だと思っているのか？そんなふうに思っているのなら君が辞めてくれ。君より優秀な黒人はたくさんいるのだから。」というようなことを言った。すこし厳しい言葉のような気がしたが、確かにその通りだと思った。現代であればデイヴィットの考え方は普通なのだが、その時代にしてみればかなり珍しい意見だったに違いない。皆、黒人は自分達より劣っているという「色メガネ」をかけていたようだから。

デイヴィットは死ぬまで「人種差別をしない」という考え方を変えなかった。この考え方のせいでデイヴィットは色々とつらい思いをした。自宅が放火され、愛嬢アンドレアを失ったし、そのことで妻との間にも長い間、

深い溝ができてしまった。だが、それにめげずに自分の考え方を貫き通したのは、とてもすごいことだと思う。私だったら、自分の考え方のために大切な人が傷つけられたり、その人との間に溝ができてしまったら、とてもじゃないけど耐えられないと思う。デイヴィットは一体、どれくらい痛みに耐えたのだろうか。そして私ならきつと考え方を変えると思う。デイヴィットのように周りを犠牲にしてまで自分の考え方を貫き通すのが良いのだろうか。それとも考え方を変えるのが良いのだろうか。きつと、どちらが良いとかそういう答えは出ないと思う。しかし「人種差別」という問題に関して言えば、デイヴィットが自分の考え方を変えなかったのは良いことだと思うのだが。

自分の考え方を貫き通すのか、他人の考えを受け入れるのかという選択はとても難しい。それに、自分の考え方を变えるのに、どれくらいの理由があるかは人によって違うので、「こういうふうになったら考え方を变えても良い」というような基準をつくることもできない。きつと、これから何十年たつてもどちらが良いのか判断できないだろう。だけど、自分の意見ばかり主張して他人の意見を聞かない石頭や、他人の意見に従ってばかりいる他力本願な人にならないようにしたいと思う。最後になったが、放火が原因の火事によって亡くなったアンドレアは、まだ二、三歳だったと思う。こんなに幼い子供がどうして命

を奪われなくてはならなかったのだろうか。彼女は自分がまだ知らない世界のいざこざにまきこまれただけだったのに。「不況」「人種差別」などは、簡単に人を殺してしまう。人が人を憎むようになるのは、本当に些細なことがきっかけになるのだということを実感した。

悲運な死を遂げたアンドレアの墓には、天使の像が捧げられた。そしてその近くには、デイヴィットと妻の墓もある。陽のあたり方によっては、三人の墓が天使の翼に包まれているように見えるらしい。今度こそ、三人で幸せになつてほしいと思う。

佳作

## 『十五少年漂流記』を読んで

電気工学科 二年

壽 一輝

実は、僕はこの有名な本をこの夏初めて読みました。読み終わって感じたのは『十五少年漂流記』という本は、決して小学生向けだけの本ではないということです。もともと僕達の年代が読むべきものだと感じました。実際、今の高校生や中学生はお金をたくさん持っていることもあってか、少し自分自身を過大評価しすぎているのではないかと思います。そ

の結果、中身の無い自信が生まれて、大人の言うことを聞こうともしない、親なんてと思つている十代が増えているんだと思います。何故、そんな年代の人にこの本を読んでもらいたいかというと、この本には人間が生きていく中で本当に大事で必要な事がたくさん書いてあるからです。

タイトルからもわかるように、この本は、十五人の少年達が漂流してしまい、無人島で生活していくという話です。この十五人というのは、ほとんどが小学生で最年長の人でも十四歳という子供だけの集まりです。誤って出航してしまつた十五人を乗せたヨットは嵐の中、何とか南米付近の離れ島に一人の犠牲者を出すこともなく流れ着きました。それから彼らの無人島生活が始まつたのです。

僕なら何が出来るだろうと考えても、死ぬほど泣いて、泣き疲れて、それからただ海を見つめて船が通ることを祈ることが精一杯だと思ひます。しかし、彼らは違ひました。まず船に入つてゐる食料・衣類・工具・武器など、これから必要となりそうなものを全てチェックします。そして、睡眠をとることの出来る場所を探したのです。冷静になつて考えてみれば確かに当然のことなのです。でも、いざという時に落ち着いて考えろということには難しい。この事から学んだのは、やはり視野が狭くてはダメだということです。必要なのは常に周りを見渡すことの出来る余裕なんだと思ひました。

しかし、いくら上級生がしつかりしていても、小さい低学年の子供達はまだこの大変な状況に耐えられないと思ひます。この問題への対策として行つたのが、学校と同じような規則正しい生活をするということです。ちゃんと勉強をして、運動もして、お手伝いもして普段と変わらないような生活をするに依り、次々と生まれてくる不安を最小限に抑えたのです。時間に縛られることの嫌いな僕には到底考えつきません。さらに、彼らは全員の代表、つまり大統領を決めたり、各自分担で仕事をして、冬が近づけばそれに備えてアザラシから油を取つたりしました。とにかく、先を読んで、互いに助け合いながらごく賢い生き方をしてゐると思ひました。

又、この本で勉強になつたのは少年達一人一人が人間の良い部分、悪い部分を表してゐる所です。全員の事を考える人、自分本位で人の言うことは聞かない人、気が弱くあまり自己主張の出来ない人、強い人に媚びる人、これは人間だれしもが持つてゐるものだと思います。彼らはその人間の長所・短所をうまく引き出し合ひ、フォローし合つて無事、二年間近くもの無人島生活を乗り切つたのです。やはり、人間は一人で生きていくことなんて出来ないのです。

僕は夏休み、一人で小旅行をしました。道中感じたのは、人の温かさ、というものでした。一人誰とも話さない時間が長くなつてしまつと、本当に辛くなつて自分が何処にい

るかすらわからなくなつてしまひます。そんな時かけてもらう言葉はたとえ一言でもとても勇気づけられます。どんなに強がつたとしても、人は誰かに助けられてゐるし、誰かを助けたいと思ひます。最も近い存在でいえば、両親がそうだと思ひます。この旅で、本当に身にしみてそのことがわかりました。

この少年達がそうであつたように、僕達ももつと相手のことを考えられる人になればと思ひました。言葉を使える人間は、その言葉でお互いをさらに知ることができ、考え合ふことができます。そしてわかり合えた時、初めて大きな力が生まれると思ひます。だから、十五人が互いに相手のことを想つてわかり合えた時、島を脱出する事が出来たのです。僕も、そんな仲間や家庭を作つていきたいと思ひました。

佳作

## 『天国までの百マイル』 を読んで

制御情報工学科 三年

古賀ひとみ

「傷」それは、誰もが抱えてゐるものだと私は思ふ。歳、性別、生まれ育つた環境、それらが全て違つたとしても必ず存在するもの

なのではないだろうか。たった十八年しか生きていない私でさえ、沢山の傷を抱えている。だが、それが全てあって自分、と考えられるようになったから今はさほど気にもしていない。

この『天国までの百マイル』は、その「傷」を、傷ついた人間をリアルに表現していると思う。とにかく、登場人物の心の傷が常に手に取るようにひしひしと伝わる。誰もが傷ついている。また、その傷を隠し通すことも、自分自身として認めることも全て自ら出来てしまうことに恐ろしさを感じた。バブル時代に栄華を極め、そのバブルと共にはじめてしまった男が、主人公の城所安男である。別れた家族の仕送りに給料は流れ、愛しているかも分からないホステス、マリの元でほとんどを過ごすという、何とも信じ難い生活を送っている。この物語は、安男が母の命をどうしても救いたいとの思いで死を宣告された母を百マイル先の病院まで運び、手術をするまでの約二年間を綴ったものだ。安男を取りかこむ人々は傷で傷を癒す人、自分の傷にも気が付けない人、人の傷ばかり気にしてしまう人、本当に様々な人々が居る。それは、信じ続けてくれた母であり、別れた妻であり、兄弟達そしてマリだ。私にとって一番印象的だったのは、マリ、やはりこの人しか居ないと思う。マリは傷つき、落ちぶれた男が大好きで、その人達を温かく包み込み、大きな愛で大きな傷を癒し、そして現実に戻す。正確に言うくと、

皆マリの元から居なくなってしまうのだ。いつも相手本位で、居なくなること承知で心から愛す。現実ではなく、幻想であり続けるのだ。だからこそ男達は立ち直れる。自分以外の誰かのための存在で、いつかは消える空気となる。この場合、男にとっては好都合だが、マリの傷は、想いは癒されないうし、報われない。だがそれで十分だと言う彼女に私は驚くばかりだった。自分の人生を全てを純粹に捧げ、笑顔を絶やさない。まるでボランティアのような生活だ、と最初私は思った。だがどうも違う。傷を癒すことで自分の傷を忘れ、立ち直る姿を見て自分の傷を癒していたのではないかと物語の終盤では思い始めていた。これさえもマリの力なのだろうかとも思う程であった。ただの一読者である私にまで、自分にとっての人、生活、取り巻くもの、全ての環境について何かを考えさせてしまうこの物語は、読んでしまった後でもまだ何か引つかかっているようでとても不思議な感じを覚えた。私はマリになれるとも思わないし、なろうとも思わない。しかし、心の中で尊敬せずにはいられないと思う気持ちもある。誰かのために、誰かの人生のために全てを捧げられる、そんな勇気を私は持ち合わせていない。そんなに広い人間にもなれていない。何がマリをそうさせたのだろう、そう考えずにはいられなかった。読みながら考えて、読み終わった後も考えて、たどり着いた結論はこれもまた「傷」がもたらしたもののなのではないかと言う事だった。

人間はロボットではない。だから欠陥は必ずある。その為に泣き、悩み、誰かを愛し、傷つき、怒り、そして笑う。様々な技術が進歩した今、ロボットを人間に限り無く近づけようと、あらゆる分野において日々試行錯誤が行われている。だがやはり、感情を細かに表すのはまだ人間だけであろう。日々を過ごして行く中で、「こんなはずじゃなかった」「あの時こうしていれば……」、そう思う事が誰しもあると思う。私達の生きて行く道はプロگرامミングすることが出来ない。それが可能ならば何も間違いは起こらないはずだ。だから、ロボットのようには正確に物事を進める事は出来ない。それはもう仕方の無いことであり、私達にはもっと大切な、もっと温かい感情を作り上げて行くことが出来るのではないだろうか。私はそう思う。日々をこなして行く中で何もかも思い通りに物事が進んでしまっはまるで面白みが無いだろう。私はまだこれから沢山の傷を負っていくだろうと思う。傷を負うことを恐れずに色々なことに立ち向かい受け入れていきたいと思う。自分の毎日を見据えるために、人間としての自分を豊かにしていくためにも「傷」を背負った人間は、かけがえの無い不可欠なものだと私は思うからだ。

## 編集後記

学生図書委員長  
(機械工学科 五年)

安部 絵美

読書は私たちにたくさんの方の人生を垣間見せてくれます。本のなかの人々の多様な人生は、読み手のところに多くのメッセージを残してくれます。本の世界に浸り読書を楽しむということには、このようなことも期待できるのです。

私はこのたびの読書感想文コンクール審査で、様々な本の様々な感想文を読ませていただきました。それらには感想文の入選者が自分を省み、自分の生き方に目標を掲げる前向きな姿勢が多く見受けられます。一冊の本との出会いは、新しい自分との出会いになるのだなど、そんな気がしました。

高専生である私たちは、大半の人が技術者

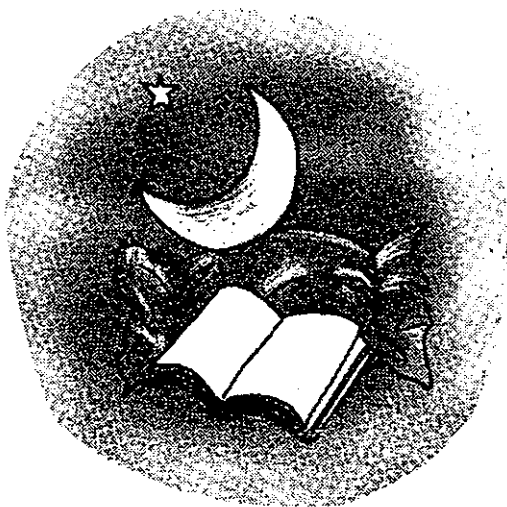
を志しています。そんな状況の中、私は最近「技術論」という講義のなかで気になる言葉を耳にしました。技術者倫理―それは、将来の私たちに問われつつづける言葉のようです。「人間としてのありよう、技術者としてどうあるべきか?」と、まるで禅問答のような問いかけに私たちはどう答えていけば良いのでしょうか。私には、それが工学の理論だけでは事足りない何か深い響きを持つように感じました。

そんなとき、講義を担当されている先生がおっしゃった「読書をしていますか。」との一言はとても印象的でした。読書をし、物事を深く考える行為―例えば読書感想文を書くということ―は、私たちが自分らしい誇りと、責務の在り方を確立していける一つの手段なのかもしれません。

この読書感想文コンクール作品集「もさく」には、厳しい審査を通過した選りすぐりの10の作品が収録されています。そのどれも入選者の力強い意志が感じられます。私は

入選者らの率直な想いに、幾度となくはっとさせられました。もちろん、感想とは個人の考え方、捉え方によって異なるものです。ですから、内容には領けることとそうでないことがあるかと思えます。しかし、それもまた物事を考える新たなきっかけとなることでしょう。

「もさく」を皆さんの手にとっていただき、読書の尊さを再確認してもらえれば、たいへん幸いだと考えています。



「むさく」第三十号

発行日 平成十五年一月八日

発行者 大分市牧一六六番地

大分工業高等専門学校

学生図書委員会

教官図書委員会

印刷所 (株)エポックアート

住所 大分市羽田九八四―一

電話 〇九七―五六九―二一八一